一般社団法人
日本音楽療法学会
Japanese Music Therapy Association

［事務局］〒105-0013　東京都 港区 浜松町 1-20-8
ＨＫ浜松町ビル６階

2025 年 7 月 15 日

一般社団法人日本音楽療法学会
日野原賞選考委員会

第５回日野原賞の受賞者が決定しました

第５回日野原賞

≪論文部門≫計２名

①　受賞者　中谷　菜々美

受賞対象論文　Music Therapy Preferences Among Breast Cancer Patients Undergoing Chemotherapy: A Qualitative Study

掲載誌　Music Therapy Perspectives(2025,40,1,miae029)

※2024 年 12 月 26 日刊行

②　受賞者　植村　真帆

受賞対象論文　Dorsal Anterior Cingulate Cortex Coordinates Contextual Mental Imagery for Single-Beat Manipulation during Rhythmic Sensorimotor Synchronization

掲載誌　Brain Sciences. 2024 July 28;14(8):757.

≪活動部門≫計１団体

受賞団体　NPO 法人あんだんて KOBE

団体運営者　和泉　裕子

活動名　知的障害者の音楽サークル「あんだんて KOBE」におけるコミュニティ音楽療法実践

2025 年 9 月 7 日（日）午前 9 時 15 分から、第 25 回日本音楽療法学会学術大会(つくば国際会議場)で授賞式が行われ、受賞者には表彰状、楯、副賞（10 万円）が授与される予定です。授賞式後には、受賞者による記念講演があります。多くの会員に聴いていただけましたら幸いです。なお、受賞記念講演は後日オンデマンドで配信されます。

日野原賞は、日本音楽療法学会（本学会）の創設と発展に貢献された故日野原重明初代理事長を顕彰する学術奨励賞として、2021 年度より創設されました。日野原先生の理念である“keep on going”を継承し、音楽療法の発展に貢献する学術研究や臨床現場での継続的な活動を奨励し、その結果、日本の音楽療法が人々の健康維持・増進に貢献することを目的としております。

日野原賞の対象は以下の 3 種です。

（論文部門）

対象Ａ：2024 年 1 月～12 月までに、日本音楽療法学会誌に掲載された原著、または事例研究の筆頭著者。

対象Ｂ：2024 年 1 月～12 月までに、国内外の学会誌（第三者による査読のあるもの）に掲載された原著または事例研究の筆頭著者（本学会員に限る）

（活動部門）

対象Ｃ：2024 年 4 月 1 日～2025 年 3 月 31 日の期間に、音楽療法の普及・発展に貢献した活動を行った本学会員、または本学会員が運営する組織・団体.

※ＢおよびＣに関しては、自薦、他薦が必要。

結果、本年度は対象 A は該当なく、対象 B の 2 名、対象 C の 1 団体が選考の対象となりました。

論文部門は、2 編の論文が甲乙つけがたく、同時受賞となりました。

受賞者は中谷菜々美会員（東海大学医学研究科先端医科学専攻）と植村真帆会員（武庫川女子大学音楽学部）です。

中谷会員の対象となった論文は、「Music therapy preference among breast cancer patients undergoing chemotherapy：a quantitative study.」(Music Therapy Perspectives, 2025,40,1,miae029)です。

筆者らは、乳がん患者の音楽療法を標準化するプロセスとして、化学療法を受けている乳がん患者が受けたいと考えている音楽療法の特徴を grounded theory approach を用いて抽出しました。この結果、「音楽との関係」「治療による苦痛」「音楽療法の好み」の３つのカテゴリーと複数のサブカテゴリーが抽出されました。

本論文は、日本で化学療法を受けている乳がん患者の音楽療法の好みに関する仮説を立てた最初の研究になります。乳がんの治療は、心理療法の研究も盛んな状況で、今後音楽療法士が総合病院に進出する機会が増える可能性があります。本論文は、丁寧に分析が行われた質的研究として高く評価されました。

植村会員の対象となった論文は、「Dorsal Anterior Cingulate Coordinates Mental Imagery for Single-Beat Manipulation during Rhythmic Sensorimotor Synchronization.」(Brain Sciences. 2024 July 28:14(8):757)です。

人間が社会的活動を行う際に「他者の動きを予測しながら、自分の行動を決定する」という高度な脳の情報処理が行われます。本論文は、これらの運動制御のメカニズムを解明するために、オドボール課題を用いた認知行動実験と脳は事象関連電位測定を組み合わせた基礎的研究です。得られた結果を研究仮説と明確に対応づけ、背側前帯状皮質の果たす役割を強調しております。

音楽療法も音（音楽）を介したセラピストとクライアントの非言語的な交流を通して効果が表れますが、これらの交流の科学的な基盤を説明する重要な研究と考えられます。選考委員会でも論文の論理性と音楽療法に貢献する可能性が高く評価されました。

活動部門の受賞団体は、NPO 法人あんだんて KOBE（運営者：和泉裕子会員）です。

同団体は 2010 年に設立後、知的障害者を対象とした月 2 回のグループ音楽療法の他に定期コンサートや舞台パフォーマンスを行っております。音楽療法士、教育関係者、音楽家、舞台芸術関係者、学生など様々な立場の人々が参加しております。公的機関を含めた団体から講演や演奏の依頼もあるそうです。選考委員会では、本団体の持続性、多くの専門家が参加している点が高く評価されました。

なお、今回の選考にあたり、論文部門、活動部門とも 1 名の選考委員会が対象となる研究・活動の関与しておりました。このため日野原賞規約及び選考基準に則り、今回の選考は論文部門、活動部門とも当該委員を除いた 6 人で選考を行いました。

今回は質的研究、基礎研究、地域に根付いた活動と、幅広い分野での成果が会員に共有されること、

とてもうれしく思います。今後は学会誌への投稿論文が増えることを含めて、多くの会員の方々に応募していただきたいと思います。

なお、スケジュールの都合上、第 5 回受賞者の抄録は以下に掲載いたします。

＊＊＊＊

第 5 回日野原賞受賞者　論文/活動抄録

《論文部門》

① 中谷菜々美

Music therapy preferences among breast cancer patients undergoing chemotherapy: a qualitative study

Music Therapy Perspectives(2025,40,1,miae029) ※2024 年 12 月 26 日刊行

【背景】

今日までにがん患者に対する音楽療法について様々な研究がなされており、治療による生活の質の低下、不安、抑うつ、痛みなどの改善に効果的であることが明らかになっている。音楽療法の有効性は、患者のニーズや疾患、治療状況に合わせて適応させることで向上する可能性があるが、がん患者の音楽療法のニーズに関する研究は少ない。

われわれは日本で周術期化学療法を受ける乳がん患者に対する音楽療法のニーズを明らかにする目的で、以下の質的研究を行った。

【方法】

研究は Grounded Theory Approach(以下、GTA と略す)に基づいて行った。本研究の対象者は音楽療法に関する知識が乏しいことが予想されたため、研究者が参加者との知識の共同構築に積極的に関与することが可能である、Charmaz K(2014)の構成主義的 GTA を採用した。

若年性乳がんサポートコミュニティ PinkRing に関係し、原発性乳がんの診断を受け、周術期化学療法を受けた経験のある、または受けている成人に対し、個別の半構造化面接を行った。各インタビュー後に分析と結果の比較を継続し、チームミーティングにおけるデータと分析結果の共有と議論通じてこの研究の信頼性を確保した。14 名へのインタビューと分析が完了した時点で、カテゴリー間の明確な関係とサブカテゴリーへの影響から、理論的飽和に至ったと判断した。本研究は、東海大学医学部臨床研究審査委員会から承認を得て実施した（承認日：2023 年 10 月 27 日；承認番号：23R073）。

【結果】

分析の結果、「音楽との関係」、「治療による苦痛」、「音楽療法の嗜好」の 3 つのカテゴリーが得られた。

「音楽との関係」のカテゴリーには、(1)過去の関係、(2)現在の関係、(3)治療中の関係のサブカテゴリーが含まれ、対象者は自身の音楽経験について語った。

「治療による苦痛」のカテゴリーには、(1)身体的苦痛、(2)精神的苦痛　のサブカテゴリーが含まれ、対象者は治療による様々な苦痛について語った。

「音楽療法の嗜好」のカテゴリーには、(1) 期待、(2)タイミングと頻度、(3)時間と費用、(4)活動の種類と内容のサブカテゴリーが含まれ、対象者は音楽療法に期待していることや具体的な音楽療法の嗜好について語った。

対象者が好む音楽療法の種類と内容は、対象者の音楽との関係から影響を受けて決定されていた。また、対象者が好む音楽療法のタイミング、頻度、時間、費用、種類、内容は、対象者の治療による苦痛から影響を受けて決定されていた。

【結論】

本研究では、化学療法を受けている乳がん患者の音楽療法のニーズについて GTA による質的研究を行い、患者個々の嗜好を明らかにした。この成果は、日本における化学療法を受けている乳がん患者の治療スケジュールに合理的に組み込むことができる音楽療法プログラムのタイプを予測する際に役立つことが考えられる。患者の希望する音楽療法がそれぞれの症状に有効かどうか慎重に検討する必要があるが、日本において化学療法を受けている乳がん患者の大多数は音楽療法の経験がないと予想され、本研究の結果を初期の音楽療法のガイドラインとして活用し、患者が抵抗感なく音楽療法を開始できるようにすることは治療上有用であると考えられる。

② 植村真帆

Dorsal Anterior Cingulate Cortex Coordinates Contextual Mental Imagery for Single-Beat Manipulation during Rhythmic Sensorimotor Synchronization

Brain Sciences. 2024 July 28;14(8):757.

感覚運動同期は、外部リズムに対して内部モデルを構築することにより、外部刺激に調和した運動を表出する神経メカニズムである。能動的なメロディーやハーモニーへの同期はリラクゼーション効果をもたらすことが知られており、音楽や楽器を媒介としたコミュニケーションによって生起する同期は、単なる感覚運動ではなく非言語的行動の体験を伴うことが考えられる。こうした背景から、音楽療法の現場においても他者への同期を手段とした活動は多く用いられるが、加齢や脳血管障害によって引き起こされる認知機能の低下により、同期運動産生能力が減衰することが示唆されている。

音楽のリズム同期においては、周期的なリズムに対するイメージ形成よる感覚運動同期の寄与が検証されてきたが、従来の神経振動理論では、意図的に逸脱したリズムに対して柔軟に同期するメカニズムを十分に説明することはできなかった。

こうした問題を解決するため、本研究は、内部モデルが音楽的ストリームの中で個々のパルスに対するイメージの形成に基づいて予測行動を表出させ、外部リズムとの予測誤差を評価し、イメージを更新することによって調和のとれた同期を可能にしているという仮説を基に、心的イメージの中核とされている背側前部帯状回 (dACC)を中心とする脳の反応と行動の分析を行った。

本研究では、1 秒毎の等間隔のパルス列からランダムにパルスを間引いた欠落シーケンスを複雑な外部リズムとし、同期タッピング中の脳の反応と行動パフォーマンスを評価した。脳の反応は、心象と知覚の調和を実現する感覚運動同期において中心的役割を果たしていると考えられているdACCのダイナミクスにより評価し、併せて、事象関連電位により心象と知覚に対する認知プロセスを推定した。行動評価では、パルス毎のタップタイミングを計測し、信号検出理論による分析から心象をパルス毎に評価した。

この結果、リズムのイメージを心の中で形成し予測することでリズム運動を柔軟に行うことが可能となることが明らかとなった。

音楽では全体のリズムに合わせて調和のとれた演奏を行うことが重要であるが、音楽的ストリームは常に一定ではない。時として意図的な遅延は演出を高め、急な停止は驚きや注意を促す。本研究の結果は、人間が心的イメージに基づき、調和の中で意図的に運動をトップダウンで制御することにより、自在に外

部リズムに同期した運動を表出できる神経機構を有していることを示唆している。

音楽療法の現場においても、心的イメージを形成する能力を涵養することで創造的認知の活性が促され、結果的に QOL の改善に資する可能性があると推察される。従って、本研究の成果は、心的イメージに基づく創造性に焦点を当てた新たな音楽療法によるアプローチ法の創製に寄与する可能性を示唆している。

《活動部門》

① NPO 法人あんだんて KOBE（団体運営者：和泉裕子）

「知的障害者の音楽サークル「あんだんて KOBE」におけるコミュニティ音楽療法実践」

１．設立の背景

本活動は 2005 年、元障害者施設指導員による知的障害児者を対象とした余暇活動の一環として、筆者が音楽分野を担う形で始まった。2007 年「音楽くらぶ・あんだんて」として独立し、個人宅にて少人数での音楽活動を発足。2010 年には神戸市青少年会館の登録団体となり、同年に NPO 法人化。

≪NPO 法人あんだんて KOBE≫として地域に根ざした音楽活動を継続している。

２．活動の概要

定例活動は概ね年齢により（おとなあんだんて）と（キッズあんだんて）の 2 グループに分かれ、それぞれ月 2 回ずつラップ、楽器アンサンブル、即興、歌唱、ダンス、リトミックなどを取り入れたセッションを実施。イベントでは両グループが同じステージに立ち、年齢を越えた共演を行っている。

３．構成と支援体制

現在の会員構成はメンバー約 25 名（キッズ 5 名、おとな 20 名）で自閉症、ダウン症、発達障害、視覚障害など多様な障害特性を有する。スタッフ約 18 名は音楽療法士を中心に、楽器講師、福祉・教育関係者、俳優、大学教授、ジャズミュージシャン、学生等による多職種協働体制をとっている。神戸大学（あーち）との連携や、韓国「劇団ラハプ」、地域の音楽団体、国内アーチスト、大学等との交流も広がっている。

４．はぴみらフェスティバルの展開

2013 年、青少年会館のイベントに初出演する。メンバーの生き生きとした表現は、家族や支援者にも大きな感動を与え、活動はさらに活性化。2016 年から市内ライブハウスにて自主企画ライブを開催し、2019 年以降は区民センター大ホールへと拡大、コロナ禍の 2020・2021 年の継続開催は反響を得、グループとして更に成長した。今年第 9 回を迎える「はぴみらフェスティバル」は、障がいの有無にかかわらず誰もが参加できる音楽イベントとして地域に定着している。

５．活動及び“はぴみら”の特徴と実践手法

本活動の最大の特徴は、メンバーが主役であること。選曲、楽器選択、役割分担、演出などをメンバー主導で決定し、ステージでもその主体性が尊重される。オリジナル脚本によるミュージカル的プログラムや、即興性を重視したジャズの手法によるアレンジとサポート演奏は、個々の反応に応じて柔軟に展開され、表現力を最大限に引き出している。さらにドラムサークル等の会場全体が一体となる交流プログラムを設定し、音楽を通したインクルーシブな時空間の創出を図っている。

６．今後の展望

2025 年の“はぴみら９”では、ヒューマンビートボクサー、ジャズミュージシャンなど、多彩なゲストを迎え、新しい出会いによる活動の更なる進化と共創の場の拡充が期待される。

本活動は “Keep on going” の理念のもと、多様性を認め合う社会の実現を目指して、今後もコミュニティ音楽療法の実践を継続していく。